
第3章
2012年選挙運動
—10月大統領選挙と12月地方選挙—

ホルヘ・ディアス・ポランコ

(2013年1月17日記)



2012年12月ミランダ州知事選のポスター。上下は、10月大統領選でチャベスに敗れた直後に同ポストに再立候補したカプリレス前知事。中は副大統領も務めたチャベス腹心のハウア候補
(撮影：坂口安紀)

はじめに

2012年10月6日の大統領選挙は、主要候補2名による激しい選挙運動を経て実施された。国家選挙管理委員会（CNE、以下「選管」）が定める公式選挙運動期間は7月1日～10月4日までの3カ月間であった。一方、12月16日に実施された全国23州の知事選の選挙運動期間は11月1日～12月13日までと定められたが、地方選挙に向けた選挙運動は、実際には10月の大統領選挙が終了すると同時に開始された。

本章では、2012年に行われたこの2つの選挙運動を特徴づけた要因、票を集めるために使われたメカニズムや手段を分析する。

I. 大統領選挙の選挙運動

1. 政治社会的状況

(1) 社会の軍事化

選挙は、軍事が関与しないきわめて民主的な行為である。しかしながら、チャベス政権下では、国軍が投票会場の警備を行うことになっている（「共和国計画」と呼ばれる）。投票会場では武器の携行が禁止されているにもかかわらず、過去4回の選挙ではこの規定が明らかに守られていなかった。しかも、共和国計画を担う国軍ではなく、一般市民の民兵が投票会場で武器を携行していることがしばしばあった。彼らはチャベス大統領の声がけで集まった熱狂的チャベス支持者らによる「ボリバル革命」⁽¹⁾防衛のための義勇軍であり、武器使用についての十分な訓練を受けていない一般市民である。

このようにベネズエラ社会では現在、武器や軍が市民社会にかかわることが増えている。上述した選挙会場における軍や武器の存在は、市民生活が軍事化してきている一例にすぎない。ベネズエラ社会の軍事化は、たとえば、チャベス政権下で多くの現職軍人が公職ポストにつき、またチャベス派の州知事候補に指名されていること、国政の運営が権威主義的になっていることなどにも表れている。しかしもっとも深刻なのは、文民と軍（cívico-militar）による共闘が

公然とほめそやされ、それが武装グループが市民を無差別に攻撃するのを助長していること、そしてそのような暴力行為に対して政府が何の対策もとっていないことである。

(2) ベネズエラ社会の二極化

ベネズエラを支配する現政権の基本戦略は、チャベス派と反チャベス派に社会を深く二極化させることである。チャベス政権は、社会が二極化しているのは、1990年代初めまで長期にわたって政治を支配してきた伝統的2大政党の責任であるとする。チャベス以前の政権が、長年にわたり多くの国民を社会サービスの対象から排除してきたこと（社会的負債）、行政組織に汚職を蔓延させたこと、強大な帝国主義諸国のいうままに政治を行ってきたことなどにより、政治社会の二極化が進展したのであると、チャベス政権は主張する。チャベス政権はこのように、政府が機能していないことの原因をベネズエラ社会のオリガルキー層⁽²⁾に責任転嫁することで、支持者らからの強い忠誠心を獲得してきた。その結果、政治の二極化に加えて、強い愛国主義とナショナリズムに根ざした、政権に対する無条件の忠誠心が生まれた。

一方、経済指標をみると、石油収入に対する依存がますます高まっている。石油収入依存の拡大はさまざまな場面でみられるが、たとえば、国内の食料生産が減少の一途をたどる一方で、国内需要を満たすべく食料輸入のために莫大な石油収入が使われるなど、食料をはじめとしたさまざまな消費財の輸入が急増している。国内食料生産の減少、あるいは基本的な公共サービスが質的・量的に縮小しているといった問題を解決するために、政府は石油収入の分配やそれを使ったさまざまな財の贈与という手段を用いている。貧困層の人々はチャベス政権下において、以前は手が届かなかった住宅や消費財、収入を、特段の努力することなく手に入れた。その結果、貧しいがゆえに国家に依存する人々が増加した。

チャベス大統領がしばしば言及するのが、独立の英雄シモン・ボリバルが成し遂げることができなかった独立の夢を完成させるという、幾度も繰り返されてきた話である。歴史をもち出し、現政権に英雄的な意味をもたせることで、政権に強く依存する国民の忠誠心は深まり強化される。それは選挙運動にも特殊なかたちで現れる。反チャベス派の候補者を、革命と対立する旧体制のオリ

ガルキーの代表者と位置づけることで、彼らをおとしめ、彼らに対する有権者の信用を失わせようとする。重要なのは、国民には何も要求せず、すべてを与えてくれる権威主義的で救世主的な政府のイメージをいかに強化するかである。

2. 選管

(1) 選管と秘密投票の原則

有権者が選挙権を行使するか否かを決定するのに重要な要素として、秘密投票の保証が挙げられる。政府側も反チャベス派の民主統一会議（MUD）側も、新聞・雑誌・インターネットなどのメディアを通して、秘密投票の原則は守られると、繰り返し主張してきた。とりわけ投票機を使った電子投票においても秘密投票は厳守されるとアピールしてきた。

しかしながら、今回の選挙では、投票会場で投票する前に有権者の身分確認のために指紋をスキャンする情報ステーションが新たに設置され、それにより秘密投票の原則が守られないのではないかと懸念が生まれた。政府は、大統領不信任投票の実施を求める署名活動をはじめ、さまざまな機会に有権者の政治選好（チャベス支持派か反チャベス派か、どのような政治活動をしているかなど）に関する情報を収集したリスト⁽³⁾を作成し、それをアップデートしてきた。それとスキャンされた指紋を組み合わせれば、各有権者がどの候補者に投票したかがわかるのではないかという懸念が広がったのである。とくに、ソーシャル・ネットワークを通して、このようなインフォーマルな情報はまたたく間に広まった。選挙関係者は投票の秘密は守られると主張してはいたが、インフォーマルな情報がそれを打ち消し、情報ステーションでの身分確認によってどの候補に投票したかがわかってしまうのではないかという危惧が有権者のあいだで根強かったことは強調しておきたい。このような懸念は、公務員など自分が誰に投票したかが自らの雇用や職場環境に影響を与えるであろう人々はいうまでもなく、一般の有権者のあいだでも広く共有されていた。

なお投票前に新たに情報ステーションでの身分確認のステップが加わったことで、投票プロセスに時間がかかり、投票のために長蛇の列ができた。そのため、選管は投票終了時間を午後4時から午後6時に延長した。ただし列に並んでいる有権者がいる場合は、さらに延長された。

(2) 選管の政治的中立性の問題

チャベス政権下では公権力の分立や独立性が守られていないという懸念が強まっている。政治が二極化するなかで、公権力はチャベス派に有利に、そして反チャベス派に不利に働いていることを裏づけるような数々の事例がある。たとえば裁判では明らかに偏った判決が下される。経済にかかわる重要な決定が国会での議論や関係者との交渉・調整なしに一方的になされる。選管も例外ではなく、選挙に関連する法律や規定、とくに選挙運動にかかわる規則については、反チャベス派の選挙運動を制限しチャベス派を有利にするよう恣意的に運用されている。また選管による選挙結果の発表や広報も、偏ったものとなっている。選管は5名の委員から構成される。憲法が選管委員は政治的に中立でなければいけないと規定しているが、4名はチャベス派であり、うち1名は与党ベネズエラ統合社会主義党（PSUV）の党員であった。反チャベス派寄りの委員は1名のみである。

3. チャベス派陣営の選挙運動

(1) チャベス政権に対する評価と投票意思

選挙前の世論調査では、政府の実績に対して有権者からかなり低い評価が下されていた。メディアは毎日のように政府の政治面、社会面での失敗を暴露して公表し、大統領自身も保健、住宅、教育政策などの面で至らないところがあったと公に認めざるを得なかった。政府は、反チャベス派から批判される前に自分から非を認めていた。しかしながらチャベス派の自己批判から伝わってくる内容は、政策の失敗の責任はチャベス大統領の取り巻き連中にあり、チャベス大統領自身には責任がないというものである。チャベス大統領は善悪を超越した存在であり、半分神のような存在と位置づけられている。この概念操作は効を奏したようで、大手世論調査会社の調査では、有権者の大半が政権の実績について批判的な評価を下しているにもかかわらず、過半の有権者が大統領選挙ではチャベス大統領候補に投票すると回答していた。

(2) チャベス大統領のカリスマ

チャベス大統領のカリスマは、ファシスト的ともいえる愛国主義を核に形成

されている。グローバル化が進み、資本主義経済が世界的な危機に直面するなか、反対に国や地域に対する意識が高まり、愛国主義が高揚する。チャベス大統領はアメリカ帝国主義に対抗する勢力の代表者となり、キューバのフィデル・カストロ (Fidel Castro) が政治の一線から引退した際に降ろした反米の旗をふたたび掲げたのである。ベネズエラ・キューバ関係もまた、アメリカのヘゲモニーに対抗してきたキューバ政府の歴史をチャベス大統領が継承するという意味において、彼のカリスマを構成する重要な要素であった。

さらに、チャベス大統領を英雄視するイメージを作り上げたもうひとつの要素は、大統領自身の病気である。チャベス大統領の病気は、マスコミによって効果的に伝えられ、大衆に強くアピールする重要な要素となった。トーレス⁽⁴⁾のいうように、英雄像は、その人物が病気になる、あるいは死亡した時に誇張される。彼の闘病生活は、その病状から考えて人間の限界を超えたものとみなされ、その結果解放者としての英雄イメージがますます強くなった。

しかし別の見方をすると、予断を許さない健康状態にありながらチャベスが大統領選に立候補したということは、大統領の一時的または絶対的な不在という状況が生じる可能性が想定されたということであり、その結果国が直面し得る事態を考えると、無責任な行為であったとみなすこともできるであろう。

(3) 選挙キャンペーンとしての「ミシオン」

チャベス政権は、第2章で説明されたとおり、2004年頃から社会の弱者層救済のために「ミシオン」と称されるさまざまな社会開発プロジェクトを進めてきた。そのいくつかは、社会開発という本来の目的よりもむしろ、チャベス政権の選挙キャンペーンの効果的なメカニズムとして機能してきたといわれている。たとえば医療プロジェクトでは、医療ケアの対象が頻繁に変更されてきたことからそれがうかがえる。「ミシオン・バリオ・アデントロ」という貧困層を対象にした医療保健プロジェクトは、もともと貧困層居住地域における基礎的医療を充実させるためのものであった。しかしその本来の目的は忘れられ、チャベス大統領自らがテレビを通して公けに失敗を認めざるを得ないような結果に至った。たとえば同ミシオンは高価な医療技術の導入に力を入れはじめ、本来の目的であった貧困層に対する基礎的医療からはかけ離れた高度医療に対象が移ってしまった。

貧困層向け住宅建設プロジェクトの例では、政府が調査せずに一方的に遊休地とみなした土地を接収してアパートを建設したが、住宅が引き渡されてまもなく深刻な構造的欠陥が露見するようになったことが最近メディアで告発されている。同様に教育プロジェクトでは、結果として在籍生徒数が減っている。これらの社会開発プロジェクト「ミシオン」は、実際にそれぞれの問題の改善・解決という目的に加え（あるいはむしろそれ以上に）別の目的、すなわち、貧困層の人々とのコミュニケーションを維持し、彼らとの感情的つながりを大切にしていれば有権者の政権への忠誠心を確保するためであるといえる。たしかに、社会開発プロジェクトのおかげで社会から排除されてきた人々の生活の質は飛躍的に向上した。しかしこれらのプロジェクトの運用は非効率であり、人々は支援を受け取りはしたが、それらが必ずしも貧困問題に対して根本的な解決策に結びついていないといえる。

4. 反チャベス派、民主統一会議（MUD）の統一候補擁立

(1) 予備選挙

MUD⁽⁵⁾は反チャベス派勢力を結集して大統領選でチャベス大統領に勝利するため、大統領選の8カ月前の2012年2月12日に、統一候補選出のための予備選挙を実施した。カプリレスが有効票合計の3分の2を得票し、30%を獲得した次点のスリア州の現職知事ペレス（Pablo Pérez）に大差をつけて、統一候補として擁立されることが決定した。

また同日には、大統領選の直後に予定されていた州知事選の一部の候補についても、同時に予備選挙が実施された。いくつかの州ではMUD内部のコンセンサスによって州知事のMUD統一候補が決定されていたが、それ以外の州知事選の反チャベス派統一候補が予備選で選出されたのである。表1は大統領選、州知事選双方の候補者を選出するための予備選挙の結果を示すものである。

MUDは、前身である民主主義調整会議（Coordinadora Democrática: CD）を継承して成立した。CDは、2002年から2004年にチャベス政権打倒をめざして発生したクーデター、石油スト、2004年の大統領不信任投票などを通して、反チャベス派勢力が結集した組織である。MUDにはさらに多くの勢力が結集している。国が抱える問題を分析して、それに対する短期、中期、長期的解決策を盛り込

表1 反チャベス派（MUD）の統一候補擁立のための予備選挙の結果
大統領候補および州知事候補

	候補者	得票		有効得票数 数	下位候補者との得票差		
		数	(%)		数	(%)	
大統領候補	Capriles Radonski	1,900,528	64.2	2,959,413	1,004,458	33.9	
	Pablo Pérez	896,070	30.3	2,959,413	785,650	26.5	
	María Corina Machado	110,420	3.7	2,959,413	72,586	2.5	
	Diego Arria	37,834	1.3	2,959,413	23,273	0.8	
	Pablo Medina	14,561	0.5	2,959,413			
州知事候補	アンソアテギ州	Antonio Barreto Sira	97,815	61.6	158,771	36,859	23.2
		Ernesto Paraqueima	60,956	38.4	158,771		
アプレ州	Luis Lippa	12,897	57.4	22,476	3,318	14.8	
	Miriam de Montilla	9,579	42.6	22,476			
アラグア州	Richard Mardo	163,959	88.0	186,251	145,592	78.2	
	Henry Rosales	18,367	9.9	186,251	14,442	7.8	
	José Diaz	3,925	2.1	186,251			
バリナス州	Julio César Reyes	25,348	48.9	51,848	15,146	29.2	
	Wilmer Azua je	10,202	19.7	51,848	1,209	2.3	
	Andrés Eloy Camejo	8,993	17.3	51,848	2,147	4.1	
	Rafael Rosales Peña	6,846	13.2	51,848	6,387	12.3	
	Pedro Pablo González	459	0.9	51,848			
ボリバル州	Andrés Velásquez	88,073	67.0	131,516	62,018	47.2	
	Raúl Yusef	26,055	19.8	131,516	15,497	11.8	
	Nelly Frederik	10,558	8.0	131,516	7,154	5.4	
	Alejandro Terán	3,404	2.6	131,516	847	0.6	
	Antonio Rivero	2,557	1.9	131,516	1,688	1.3	
	Noel Vargas	869	0.7	131,516			
コヘデス州	Alberto Galíndez	17,250	77.9	22,148	13,270	59.9	
	Dennis Fernandez	3,980	18.0	22,148	3,062	13.8	
	Henri Gutierrez	918	4.1	22,148			
ファルコン州	Gregorio Graterol	46,889	60.0	78,151	26,798	34.3	
	Eliezer Sirit	20,091	25.7	78,151	8,920	11.4	
	Aldo Cermeño	11,171	14.3	78,151			
グアリコ州	José Manuel González	26,459	55.4	47,743	12,479	26.1	
	Franco Gerratana	13,980	29.3	47,743	10,596	22.2	
	Jesús Urdaneta	3,384	7.1	47,743	1,664	3.5	
	Becerra Hinderburgo	1,720	3.6	47,743	280	0.6	
	Lorenzo Tovar	1,440	3.0	47,743	680	1.4	
	Orlando Linares	760	1.6	47,743			
メリダ州	Léster Rodríguez	47,509	51.9	91,453	3,565	3.9	
	Ramon Guevara	43,944	48.1	91,453			
ミランダ州	Carlos Ocariz	312,673	68.3	457,667	167,679	36.6	
	Enrique Mendoza	144,994	31.7	457,667			
モナガス州	Soraya Hernandez	32,792	54.8	59,845	18,180	30.4	
	Karim Abiad Meneses	14,612	24.4	59,845	9,694	16.2	

(出所) <http://actualidad-presidenciales2012.blogspot.com/2012/02/resultados-primarias-mud-capriles-639.html>

んだビジョンや公約を練り上げるための専門家集団も集結した。カプリレス候補は、このようにMUDが大統領選挙に向けて積み上げてきた準備を背景に、少なくとも予備選挙で獲得した票数を本選挙で獲得して勝利することをめざして擁立された。

なお、一般支持者らによる予備選挙を実施した反チャベス派とは対照的に、チャベス派の大統領候補は予備選挙が実施されることなく、チャベス大統領と決まった。それは、最大のチャベス派政党PSUVにとって、チャベス大統領が連続再選されることが必要であったためである。そういう状況では、チャベス再選に向けた選挙運動がいつ開始されたのかは定かではないし、また終わりもないのである。

(2) カプリレスの経歴

カプリレスの政治キャリアは1998年12月の国会議員選挙に初当選し、1999年に国会の下院議長および両院議会の副議長をいずれも史上最年少で務めたことに始まる。しかしこの国会は、1999年に設立された制憲議会によって解散されたため、数カ月の短い期間で終わった。2000年以降カプリレスは地方政治で実績を積んできた。2000～2008年はカラカス首都圏に位置するバルータ市の市長を2期務めた。2008年にはバルータ市も内包するミランダ州の知事選に出馬し、チャベスの腹心であるカベジョ（現国会議長）を敗って当選し、以来国民からの支持を得てきた。このような経験から、ミランダ州知事選で、前副大統領であったチャベス派のハウア候補に対抗するには十分な政治経験をもっていたといえる。

カプリレスは、MUDを構成する第一義正義党（Primer Justicia: PJ）の創設者のひとりでもあり、党員である。またカプリレスは、映画館チェーンを経営する裕福な一族の出身であることから、チャベス大統領からはオリガルキー出身であるとして、攻撃されてきた。

5. 選挙運動の概況

2012年10月の大統領選挙を前に、ベネズエラ社会は二極化され、相変わらずどちらに向かうともわからず、候補者の公約をみても過去の選挙運動の繰り返しであった。チャベス派は、「21世紀の社会主義」を継続、深化させ、コミュニン国家を建設することを国家ビジョンとして掲げる。一方、反チャベス

派は、政府の透明性、情報公開、効率性向上の必要性などを訴えている。

(1) 選挙資金およびインフラ資源

各候補者の選挙運動を支える資金源⁽⁶⁾に関する情報の入手はきわめて難しい。というのも過去14年間、チャベス政権下のあらゆる公的部門がそうであるように、資金に関する情報が開示されないからである。とはいえ、全国各地で行われた政治集会や動員の様子を見れば、州政府や市政府の公的資金がチャベス派候補者の選挙運動に使用されたことは明らかである。首都カラカスでチャベス派の政治集会が行われる際には、全国各地から数多くの公用車が、大勢の支持者を輸送するのに使われていたことは、全国の新聞が幾度も報道している。チャベス大統領の選挙運動の動員には、州政府、中央省庁を含めさまざまな公的機関が所有する輸送手段を使うことが常態化している。

また、奨学金の受給者や社会開発プロジェクト「ミッション」の受益者、公務員などが、選挙にあたって特別給付金を支給されたことは広く知られている。豪雨その他の自然災害の被災者も1世帯当たり4800ボリバルの特別給付金を受け取った。各種ミッションの受益者は400億ドル以上を支給されたと推計されるが、選挙直前には、彼らに対して家電製品も配布されていたことが報道された。一例として、モナガス州のタレック知事（Tarek W. Saab, チャベス派）が2012年11月11日づけブログで発信している記事をみてみよう。

「バルセロナ市で（中略）開催された式典において、タレック知事は以下を贈呈しました。ベッド24床、洗濯機26台、キッチンガス台36台、冷蔵庫48台、エアコン10台、ミシン11台、二段ベッド12床、冷凍庫29台、テント2枚、扇風機3台、食料庫2台、コーヒー用魔法瓶2つ、テレビ2台、配達用自転車1台、建設用資材です」⁽⁷⁾。

同様のことが、全国各地から報告されている。国家は大統領個人に具現化されるという国家概念からして、このような目的に使われた資金が国庫から支出されていたことは明らかであろう。または公務員の給与からチャベス候補への選挙資金への貢献という名目で差し引かれたものもあったであろう。金額は不明だが、こうしたことがあったのは確かである。これらの費用を推計するにはより詳細な調査が必要で、困難な手続きが必要になると思われる。

対照的に、カプリレスの選挙運動で使われた資金の額は大きくなく、そのほ

とんどが支持者や支持政党からの自主的な献金であった。カプリレスが海外の人権団体や民主主義擁護団体から間接的な支援を受けた可能性はある。しかしチャベス派の選挙資金の金額が不明であるのと同様、ここでも正確な金額は不明である。

(2) 象徴資源

先述したとおり、チャベス大統領の選挙運動においてもっとも重要であったのが、象徴資源の利用であった。象徴資源とは、票獲得のために候補者が社会に与える自らのイメージ操作のことである。チャベス大統領は、ベネズエラの歴史上の重要人物と自らを重ね合わせてアピールすることによって自らのカリスマを築いてきた。そのやり方は、政府が推進する社会開発プロジェクトや政策にもみられる。「ミシオン」その他さまざまな社会開発プロジェクトの名称の大半は、独立運動の英雄や歴史的出来事にちなんで名づけられている。独立の英雄シモン・ボリバルが道半ばで命を落とし果たせなかった独立というプロジェクトを、チャベスの姿を通じてボリバル革命として完遂させるというものである。

すなわち、これは6年の任期にしばられない長期的プロジェクトなのである。そのため、チャベスが2000年の大統領選挙で勝利して新憲法下で政権の正統性を確立して以来、法的な選挙運動期間というものは実際のところ意味のないものになったといえる。単に運動が強くなる時期と弱くなる時期があるというだけで、内容はいつも同じ、ボリバルの解放（独立）運動を完遂し、オリガルキーを権力から退け、決定的な危機にある資本主義の構造的欠陥を克服する唯一の手段として「21世紀の社会主義」を設立することである。このような象徴資源の利用は、マスコミを操作してチャベス大統領の闘病の様子を報道するなかでさらに強まり、すでに英雄視されているチャベス大統領をより英雄視することとなった。

一方カプリレスの選挙運動の中核は、変革を訴えることであった。カプリレスのいう変革とは、ひとつにはチャベス政権下の権力または政府の装置としての国家に対して、市民の権利を要求し、勝ちとることである。また、いきすぎた国営化や非生産的雇用を抱えて停滞している経済の活性化も含まれる。カプリレスは、社会政策としてチャベス政権のミシオンを再定義し、内容を深めて

いき、アドホックな対応や不安定な資金源といった問題を改善し、これを国家の社会政策として制度化していくことを約束した。チャベス政権のミッションは、社会開発を進めるというイニシアティブとしては評価されるべきものであるが、現実には汚職、資金の横流し、透明性の欠如などが蔓延しており、運営状況は劣悪であると批判されている。カプリレスは選挙運動において、チャベス政権の失策や不備を分析し、なかでも行政能力の低さと能力主義が廃止されたことに注目し、それらの改善こそが市民のための政治行政を可能にすると考え、新しい政府プログラムを作り上げた。そのためカプリレスの選挙公約はテクノクラートの色合いを帯びている。それをしてチャベス大統領は、カプリレスの政策プログラムは、ベネズエラが過去・現在において抱えてきた諸悪の根源であるネオリベラル経済政策と同じであると糾弾した。すなわち、資本主義の呪縛から国を解放しようとするカウディージョ（頭領、チャベスのこと）は、葬り去るべき過去を復活させようとするオリガルキー（カプリレスをはじめとする反チャベス派）と対決することになったのである。このような敵対的姿勢からは国内問題の解決のための対話や討論は生まれず、生まれてくるのはどのようにして権力を維持し拡大するかといった議論である。国民を真に代表するためには権力を維持、拡大しなければならないが、ここでいう国民とは、ベネズエラ国民という意味ではない。旧態依然としたブルジョア階級の支配下で、自らの能力や価値とは無関係に、常に社会生活や政府の恩恵から疎外されてきた者たちという意味である。

チャベスとカプリレスの言説について、ミレスはこう述べている。

「チャベスは叫び、身振り手振りを交え、笑い、支持者を笑わせ、泣き、泣かせる。彼に忠実な者たちは、チャベスが公けの場に出てくるたびに、まるで教会のミサに出席してカタルシスを得たような気持ちにさせられる。チャベスは国民の宗教的無意識、さらには魔術的無意識にはたらきかける。つまり、彼のメッセージは政治的なものではないのである。むしろかなり反政治的であるとさえいえる。一方カプリレスは違う。政治は、具体的な問題があるからこそ役割があるのである。たとえそれが山奥の失われた集落であってでもである。

カプリレスは進歩について話すが、チャベスは過去について話す。カプリレスは多様な人種の背景のベネズエラ国民に向けて話しかけるが、チャベスはボリバルの容貌について人種差別的な発言をする。カプリレスは経済の近代化について話すが、チャベスは過去の軍事的栄光について話す」⁽⁸⁾。

ミレスは、選挙の裏にある状況を明確に指摘している。チャベスの目的は、チャベスというリーダーを通して具現化された宗教的な希望を、貧しい人々に与え、支持を得ることである。一方、科学主義指向の（テクノクラートの）カプリレスは、日常的な問題の解決に焦点を当てようとしている。

候補者間で議論を戦わせるような機会はない。選挙運動は、対話する場でも思想を対決させる場でもなく、相手を批判することに終始するだけの場となった。チャベス大統領は対抗馬のカプリレス候補を名前で呼んだことは一度もなく、「マフンチェ」(majunche) などと呼んでいた。これはベネズエラ特有の言葉で、「能力がないこと、凡庸」といった意味をもつ。さらには、カプリレスのことを「クーデターの代表者」「極右」「ヤンキー帝国主義の代表者」に始まり、「豚」「役立たず」そして「ホモセクシュアル」とも呼んだ⁽⁹⁾。

II. 2012年12月の州知事選挙における選挙運動

1. 大統領選直後の地方選挙

2012年10月の大統領選挙以降、12月の知事選挙前に新しい展開があった。チャベス大統領が政治舞台から「退場」したのである。ベネズエラにはチャベス大統領の病気⁽¹⁰⁾に対処できる医療技術が存在するにもかかわらず、チャベス大統領はキューバに治療を受けに行った。しかし病気の進行具合について政府は情報を出さず、ましてや治療の詳細については情報がまったくない。とはいえ、政府が発表済みであったチャベス大統領の南米諸国連合（UNASUR）サミットへの出席を取り消したことから、チャベス大統領は深刻な健康状態にあることが推測される。ベネズエラの権威ある医師らは、最近の状況からは遠くないうちにチャベス大統領の死亡の可能性もあるとした。

2012年の大統領選挙はチャベス勝利に終わったが、12月の州知事選挙においても同様にチャベス派勝利の結果となった。しかし、候補者の選出方法がチャベス派、反チャベス派では異なっていたため、有権者の選択に大きな違いが生まれた。第一に、州知事選挙においては、チャベス派候補は基本的にチャベス大統領自らが各州の知事候補を指名したことである。チャベスが知事候補を指名したということは、「チャベスの候補者となること」が、チャベス派候補者としての正統性の根拠になるという意味において、最高司令官への忠実を絶対視するボリバル革命の論理に沿ったものである。一方反チャベス派 MUD は、知事候補擁立のために予備選挙を実施した。反チャベス派の予備選挙の結果については、表1をご覧ください。

知事選でもうひとつ注目されたのは、チャベス派知事候補の大半が軍人や元閣僚であったことである。これは本章の冒頭で述べた社会の軍事化を示すものでもあり、またチャベス大統領が、人となりをよく知り自らへの忠誠を示してきた人物以外をあまり信頼していないということの表れでもあったと考えられる。一方、反チャベス派の候補者は全員が文民（軍人ではない）である。反チャベス派の知事候補で唯一元軍人であったのは、ララ州知事で再選をめざしたファルコン候補（Henri Fálcon）である。彼は知事選に初挑戦したときはチャベス派候補として立候補したが、その後チャベスから離反し、今回は反チャベス派 MUD 候補として再選をねらった。

両陣営のもうひとつの違いは、反チャベス派の知事候補は全員がその地方を代表するリーダーであったのに対して、チャベス派候補のなかにはチャベスによってゆかりのない州の知事候補に指名されたものもいたということである。

地方選挙では大統領選挙とは異なる動きもあった。注目されたのは、チャベス派内部の分裂である。とくにベネズエラ共産党（PCV、以下「共産党」）は、与党 PSUV がチャベス大統領による指名によって知事候補を決めたことに反発して、複数の州で独自候補を擁立した。以下は、与党 PSUV のカベジヨ副党首の記者会見における発言に言及した新聞記事である。

「大統領の名前を利用し、チャベスの候補者だといって国民をだましている者がいる。スクレ州のロドリゲス（Félix Rodríguez）はチャベスの候補者ではない。チャベスの候補者はアクーニャ（Luis Acuña）

である。アプレ州のチャベスの候補者はカリサレス (Ramón Carrizales) である。エロルサ市の市長は自分が候補者だといっているようだが、それは違う。ポルトゥゲサ州のチャベスの候補者はカストロ・ソテルド (Wilmar Castro Soteldo) だ。ポリバル州の候補者は、ランヘル・ゴメス (Francisco Rangel Gómez) だ。チャベスの候補者であると偽って国民の一部をだまそうとする者がいる」と、PSUV のカベジョ副党首はスクレ州からテレビ中継された記者会見で述べた。そして「すでに候補者がいるにもかかわらず、自分こそがチャベスの候補者などというものは、国民に嘘をついている。自らの立場をわきまえるべきだ」と付け加えた。共産党的のように、連立与党を組む仲間でありながらいくつかの州で独自候補を擁立した政党もある。それに対してカベジョ副党首は、「相違を埋める」べく対話を続けていると発言した。また、「PSUV は、連立与党を組む政党が、州知事選で独自候補を擁立したければその意思を尊重する。しかし、強調しておくが、それらは PSUV ではなく、チャベスとその社会主義革命政権を維持するために“PSUV に協力してきた友人たち”である。」とも述べている。「もしチャベス司令官および彼の政党の決定を支持しないと決めたのであれば、それは党に属しているとはいえないはずだ。手続きは必要ない。PSUV に属しているのであれば、党とそのリーダーを尊重すべきだ。PSUV に属しているといいながら自分の名で立候補しようとする者は、PSUV の決定に違反していることになる。しかし、だからといってお前はもはや革命家ではないと言い渡すつもりもない」⁽¹¹⁾。

次の写真はチャベス派のアラグア州知事候補タレック (Tarek El Aissami) のポスターである。ここでは何も説明する必要はないであろう。

チャベス派の州知事候補をこのように紹介し、宣伝するのは、大統領選挙でのチャベス勝利に便乗しようとするものである。世論がチャベス政権の政策運営が非効率だと評価していたとしても、有権者の過半数がチャベス大統領を支持するという事実の前には、チャベスが選んだ候補者はチャベスを支持するかぎり確実に当選するという革命論理が支配してしまう。これは「航空母艦」効



「アラグア州ではタレックとともにチャベスが勝利する」

果⁽¹²⁾とも呼ばれる。チャベス派の知事候補は、明らかにこの効果に後押しされたといえる。最たる例が、副大統領職を辞してミランダ州知事選に立候補したハウア前副大統領である。大統領選でチャベスに敗北した反チャベス派統一候補のカプリレスはミランダ州の現職知事であり、大統領選敗北後に再選をかけてミランダ州知事選に立候補していた。そのカプリレスに対して、副大統領としてチャベス大統領の厚い信頼を得ていたハウアは、航空母艦効果を頼みに挑んだのである。しかし地元での支持の高いカプリレスに敗北を喫する結果となった。

2. 主要州の知事選の選挙運動

つぎに、全国主要州における選挙運動の内容の分析に入りたい。表2は、州別の有権者人口、知事候補者数、各州の有権者10万人当たりの候補者数を示すものである。

表にみられるとおり、有権者10万人当たりの候補者数は、有権者の少ない州の大多数、つまり農村人口が多く平均年齢も高く、貧困人口も多い州においては、都市人口が多く有権者が多い州に比べて、候補者数が多いことがわかる。とくにアマソナス州では候補者数が全国平均のほぼ6倍であり、コヘデス州、デルタ・アマクロ州など人口が少ない州では全国平均の3倍である。ただし、それらの州の候補者の大半は、地方の政治勢力の代表であり、政治が二極化し、大統領選がほぼチャベスとカプリレスの一騎打ちとなっているなかでは、これらの地方勢力の立候補者は、さほど影響力をもたない。

このような特徴や主要候補者の選挙運動の状況をふまえて、いくつかの州を選び、与野党の候補者の選挙運動を分析しよう。

(1) ミランダ州

ミランダ州は、全国で最大の有権者人口200万人近くを抱えており、カラカス

表2 ベネズエラ2012年地方選挙
州別・有権者人口別・知事候補者数

州	候補者数 (人)	有権者数 (人)	全国有権者数に 占める当該州の 有権者数の割合(%)	有権者10万人 当たりの 候補者数
アマソナス	6	97,560	0.56	6.15
アンソアテギ	7	1,013,188	5.81	0.69
アブレ	4	313,874	1.80	1.27
アラグア	5	1,173,046	6.73	0.43
バリナス	3	531,277	3.05	0.56
ボリバル	10	950,034	5.45	1.05
カラボボ	9	1,533,809	8.80	0.59
コヘデス	7	225,036	1.29	3.11
デルタ・アマクロ	4	114,043	0.65	3.51
ファルコン	6	638,516	3.66	0.94
グアリコ	3	503,312	2.89	0.60
ララ	4	1,203,490	6.91	0.33
メリダ	7	584,457	3.35	1.20
ミランダ	4	1,993,236	11.44	0.20
モナガス	6	599,082	3.44	1.00
ヌエバ・エスパルタ	4	334,218	1.92	1.20
ポルトウゲサ	6	586,710	3.37	1.02
スクレ	5	630,820	3.62	0.79
タチラ	5	826,821	4.75	0.60
トゥルヒージョ	3	506,233	2.91	0.59
バルガス	5	268,605	1.54	1.86
ヤラクイ	5	408,208	2.34	1.22
スリア	4	2,389,371	13.71	0.17
合計	122	17,424,946	100.00	0.70

(出所) 国家選挙管理委員会 (CNE) ウェブページ (<http://www.cne.gov.ve>) より筆者計算。

首都圏の一部も同州に含まれる。ミランダ州では、2008年の知事選挙で、チャベス政権の主要官僚のひとりカベジョを破ってカプリレスが知事に当選した。それ以来ミランダ州は地方選挙の要となる重要な州のひとつとなった。これに関して大手世論調査会社のシエメル社長 (Oscar Schemel) の発言を現地ニュースが次のように伝えている。

シエメル氏は、「ミランダ州で反チャベス派が敗北することがあれば、反チャベス派はリーダーシップを失うことになるであろう」と

発言した。同氏によれば、カプリレスがミランダ州知事選挙に立候補することを決めたのは、「計算されたリスク」であったようだ。というのは、カプリレスは、反チャベス派内部で自らのリーダーシップを維持するためには、地方における基盤が必要になるだろうと考えたというのである。ミランダ州知事ポストを失うことは、反チャベス派の象徴的・政治的リーダーシップを失うということになる。シェメル氏は、「州政府は財政的な基盤であり、政治を投影する場である。カプリレスが州知事選に立候補した決断は正しかった」と述べた。また、過去の反チャベス派の（大統領選）候補者はいずれも知事か元知事であったことを思い起こさせた。

さらにシェメル氏は、「彼ら（チャベス派）は、重要州であるミランダ州の知事ポストをとる機会をうかがっていた。ミランダ州の敗北は、“単なる地方選挙を超えた”インパクトをもたらすであろう。なぜならば、演説や教養、政治面で足りない点があったとしても、ベネズエラ国民はカプリレスを反チャベス派リーダーとして認識しているため、ミランダ州知事選挙でカプリレスが敗北すれば、それは単なる地方選挙での敗北という以上の意味をもつだろう。ミランダ州を失うことは、象徴的な意味でも、また政治的な意味においても、反チャベス派にとってはリーダーシップを失うことになろう。そのようなことになれば、反チャベス派はリーダーシップを再構築し、“国が経験している新しい現実を解釈し直さ”なければならなくなるだろう」と続ける。

シェメル氏によると、地方選挙は政策理念をアピールすることがかぎになる。シェメル氏は、大統領選挙の選挙運動中に、チャベスが政治の軌道修正をすると約束したことがきわめて重要であったという。そしてその軌道修正の約束は、地方選挙の選挙運動にも同様に重要なインパクトを与えたと考えている。シェメル氏は、「これほどの短期間に候補者を優位に立たせるのは困難で、イメージを売り出すにも時間が少なすぎる。知事候補者の人となりよりも政治理念をアピールしなければいけない。地方選挙でも大統領選と同じことを選挙運動でアピールすることが重要だった」と述べている。

またシェメル氏は、(大統領選に比べて)地方選挙においては、有権者は感情的な要素よりも合理的な判断を重視するだろうと言う。「有権者は、“自分の問題を一番解決してくれそうな候補者は誰だろう”と考えている。また、地方選挙においては大統領が参加しないため、合理的な判断がより大きく投票に反映される。革命にとって“決定的な”テーマは、治安の悪化、失業、そして民間部門への接近である」⁽¹³⁾。

以上の言葉は、ミランダ州は有権者数が多いというだけでなく、与野党どちらにとっても敗北が大きな意味をもつという意味で重要な州であることを物語っている。とりわけ反チャベス派にとっては、再選を賭けたカプリレス州知事候補が大統領選でチャベスと対戦したばかりであることから、重要な州であった。ミランダ州の社会階層の構成をみると、富裕層から州北部の沿岸地帯にある極貧層まで、あらゆる階層が混在している。前回の知事選挙ではカプリレスがチャベス派候補を破って当選した。今回の対戦候補のハウアは副大統領で、チャベス政権でもっとも表に出てきたチャベス政権のスポークスマンである。

チャベス派候補ハウアの選挙運動は、州行政に対する選挙公約というよりは、反チャベス派候補カプリレスへの個人攻撃や、ミランダ州のような重要な州にはチャベス大統領と連帯して仕事ができる政府が必要であるという主張に終始したものであった。ハウア候補がチャベスの副大統領であったことから、ポリバル革命やチャベス政権の目標を達成するためには中央政府との協力体制が必要であるという訴えは説得力を増し、ハウアが落選すると不必要な対立が生じると主張した。

州知事候補を「チャベスの候補者」と位置づけるのは他の州と同様であるが、ミランダ州においては、ハウアがチャベスの側近で副大統領であったということから、とりわけその傾向が強い。ハウアは選挙運動中には、チャベス大統領と親しい関係にあることを強調したスローガンやフレーズを繰り返し、チャベス同様に「愛情」「親愛」「まごころ」などの語句を常用した。たとえば、ミランダ州を初めて訪問した際、ハウアはこう述べている。

「私たちは良心、愛情、約束の種をまきにきました。私は皆さんか

らの愛情をひしひしと感じています。ミランダの皆さんの深い親愛の情を全身で感じています」⁽¹⁴⁾。

ハウアは対戦相手である現職のカプリレス知事は無責任であると繰り返し、州行政の非効率を批判し、「自慢できるような事業がひとつもない」と述べた。とりわけ洪水で家や家財道具を失った被災者を見舞うために州でもっとも貧しい沿岸地帯を訪れたときにはこの点を強調した。

ハウアは選挙公約として、チャベス政権下で打ち出されたばかりの「コミュニケーション国家」⁽¹⁵⁾の政府機関をさまざまな面で強化するために、道路の維持管理、住宅、治安など、国家の重荷となっている問題の解決のために、それらにかかわる資金をコミュニケーション⁽¹⁶⁾に移転すると約束した。治安問題については、警察の撤退や現州政府が治安問題を軽視していると批判した。チャベス政権が最近になるまで治安問題に取り組んでこなかったことを考えると、副大統領であったハウアからこのような批判が出るのは興味深い。チャベス政権は、治安悪化が「メディアによってセンセーショナルに取り上げられている」というだけでは片づけることができないレベルの深刻な問題であることに、ようやく気がついたところなのである⁽¹⁷⁾。

一方カプリレスは、低所得者層向け住宅供与のプログラム「ミシオン」では、事実上生活インフラも整備されていないような使いものにならない住宅を低所得者層に引き渡しているとして、チャベス政権の非効率なポピュリズムを批判した。

カプリレスは演説で、政治色に関係なくすべての州民のための政治を行う必要性を強調する。選挙運動でもっとも力を注いだのは、実際に選挙スローガンとして掲げていた「私の選挙スローガンは、私の知事としての実績そのもの」が示すとおり、知事としての実績を訴えることであった。一方で、チャベス派の前知事カベジョを「アル・カボネ」と呼んで公金横領で糾弾した。

なおミランダ州知事選挙には、ほかにも当選の見込みはないものの興味深い経歴をもつ候補者が数名いたが、選挙戦は明らかにハウアとカプリレスの一騎打ちに集約された。

(2) スリア州

ミランダ州と同様、スリア州もまた、与野党両陣営が勝利を熱望した重要州であった。2012年10月の大統領選挙では同州の有権者数は240万人で、全国の13%以上を占める大票田であるためである。2012年12月の知事選挙まで反チャベス派が現職知事を抑えるミランダ、カラボボ、ララの3州の人口を加えると、有権者人口の50%以上になるため、スリア州で勝利することは重要であった。

スリア州では、反チャベス派からはパブロ・ペレス、チャベス派からはアリアス・カルデナス (Francisco Arias Cárdenas) が立候補した。ほかにも宗教系・先住民系団体の女性候補者が2人いるが、あまり重要ではなく、ペレスとカルデナスの一騎打ちとなった。

反チャベス派は、大統領選挙の統一候補を決める予備選挙で州知事選挙の統一候補も一部選出していたが、予備選挙を通さずに反チャベス派 MUD 内のコンセンサスで統一候補に選ばれた知事候補もあり、ペレスはそのひとりである。スリア州の州都マラカイボ出身で43歳、現職のスリア州知事である。MUD の大統領選統一候補の座をめぐる MUD 内の予備選挙に臨んだがカプリレスに敗北し、その後スリア州知事として再選をねらって立候補した。

一方、アリアス・カルデナスはスリア州出身ではない。タチラ州出身の62歳、元軍人であり、最後の階級は司令官であった。1992年2月4日、チャベスとともに、当時のペレス政権 (Carlos Andrés Pérez) を打倒する2月4日クーデターに参加した。1998年の大統領選挙ではチャベスを支持し、自身はスリア州知事に再選された。その後すぐにチャベスから離反し、2000年の選挙では反チャベス派のスタンスで大統領選に立候補してチャベスと対決した。同選挙戦ではチャベスのことを臆病者、権力の亡者と呼んだが、チャベスに敗北し、その後4年間は反チャベス派に所属した。2002年4月にチャベス大統領が2日間政権を追われた事件で、反チャベス派市民が大統領府に向かって非武装の抗議行進を行っているのに対して、チャベス大統領が武器使用を命じたことに関して、アリアス・カルデナスはチャベス大統領のことを「手に血がこびりついた殺人者」とも呼んでいる。2004年のスリア州知事選挙では反チャベス派の統一候補ロサレス (Manuel Rosales) と対戦したものの、得票第3位にとどまった。その1年後、「塀を飛び越えて」再びチャベス派に舞い戻った。自分の間違いを認めて古巣に戻った褒美として、チャベスによって2006年に国連大使に任命されている。

(3) ララ州

ララ州はスリア州のとなり、国の西部に位置し、有権者の数は120万人以上と推定され、有権者数では全国で4番目に重要な州である。公式には州知事選に4人の候補者が立候補していたが、当選の見込みがあったのは反チャベス派MUDの候補者ファルコンと与党PSUVの候補レジェス・レジェス(Luis Reyes Reyes)である。ファルコンは再選をねらう現職知事で、レジェス・レジェスは元知事である。ファルコンは2008年の州知事選挙にはチャベス派候補として立候補して当選したが、徐々にチャベス派とは距離をおくようになり、ついに離反してMUDに合流した。

両候補ともに選挙運動では、州が抱える問題について議論することなく、公共事業の竣工式や引き渡し式で、それが自らの実績であるということのアピール合戦に終始した。チャベス派のレジェス・レジェスは、中央政府から直接資金を受け取って選挙運動を展開した。今回の選挙戦では、有権者への白物家電製品の配布が目立った(*El Universal*, 19 de noviembre de 2012)。

ララ州が重要なのは、先述したように有権者数が多いこともあるが、そのほかに、反チャベス派の候補者ファルコンが、もとはチャベス派であり、離反したという経緯による。ファルコンが2008年選挙で知事に当選できたのは、同州ではつねにチャベス派が当選してきたためである。離反組のファルコンが今回の選挙で当選すれば、チャベス政権下で中央集権圧力が強まるなかで、それに抵抗する地方の力を示す事例になったであろう。

過去数年、反チャベス派の有力政治リーダーが、被選挙権を剥奪されることが続いている。これは、前述したとおり司法などの公的権力の独立性が低く、政府からの圧力によってそのような措置がとられるものである。ファルコンもほかの反チャベス派政治リーダー同様、被選挙権を剥奪されるところであった。結局それを避けることができたのは、彼が立候補に向けて構築してきた政治手腕によるものといえる。

(4) ポリバル州

ポリバル州は、石油以外の数多くの基幹産業、具体的には鋳業、製鉄、鉄鋼、アルミニウムなどの金属産業に従事する労働者が多く、有権者人口が100万人近くにのぼる。ポリバル州には、国営、民間ともに、金属機械産業を中心とした

大企業が集積しており、また伝統的にそれらの産業で働く労働者の組合活動が活発な地域でもある。

近年ボリバル州では、民間企業、国営企業双方の労働者による抗議行動が増加している。今回の州知事選挙は、チャベス政権になってから同州で労働組合による抗議行動がもっとも増えている状況下で実施される選挙となる。ボリバル州で労働者による抗議行動が高まっているのは、チャベス派政治リーダーの政治運営に対して州民が低い評価を下したことに加え、チャベス政権による反チャベス派の労働組合や政治リーダーに対する迫害と抑圧に反発したものである。

反チャベス派の知事候補ベラスケス（Andrés Velásquez）は政治経験が豊富で、1993年に大統領候補になったこともあり、グアヤナ地方で労働運動指導者として幅広い経験をもつ。ボリバル州知事も経験した。今回は、チャベス派の代表として再選をねらうランヘル・ゴメス（Francisco Rangel Gómez）と対戦した。ベラスケスは、ボリバル州の主要問題は治安悪化、水資源管理、医療保健であると指摘した。またベラスケス候補は、チャベス派候補であるランヘル・ゴメス知事から卑怯な誹謗中傷を受けていると批判した。とくに州営メディアにおいて誹謗中傷が激しいことから、ベラスケスはランヘル・ゴメス知事が州営メディアを支配していると結論づけている。それらの誹謗中傷に対して、ベラスケスは証拠を提示して身の潔白を示した。

(5) カラボボ州

カラボボ州の有権者人口は全国第3位であり、10年以上前から知事ポストは反チャベス派、とりわけサラス（Salas）一族が握ってきた。反チャベス派候補、サラス・フェオ（Henrique Salas Feo）は知事であった父親の地盤を引き継いで知事となっており、今回の選挙運動は父親と彼自身の実績をアピールすることが中心であった。政治的にみれば、世襲はサラス・フェオ候補にとってはマイナス要因となり得る。あだ名の「ひよこ」を自ら名乗りつつ「ひよこのポイント」と名づけた社会開発プロジェクトを中心に選挙運動を開始し、どの候補や政党を支持するかにかかわらず、すべてのカラボボ州民の知事になると誓った。

一方、対戦相手のチャベス派候補アメリカチ（Francisco Ameliach）は、国会議長を務めた経験もある軍人であるが、チャベス政権内ではあまり目立たない存

在である。アメリカ候補は、自身の選挙陣営および党員に、「1×10方式」の適用を訴えた。これは大統領選で使われた方法で、一人ひとりが有権者に働きかけてチャベス（派）支持10票を獲得するというものである。「選挙運動期間は非常に短いので、1日1日が勝負だ。1×10方式を復活させ、一軒一軒訪問しなければならない」とアメリカ候補は述べている（*El Universal*, 2 de noviembre de 2012）。

カラボボ州は自動車の組み立て関連産業、化学産業など、製造業が集中する重要な州であり、給与労働者人口が多い。にもかかわらず、貧困がなかなか減少しない州のひとつでもある。

むすび

今回の大統領選挙および地方選挙で特筆すべきことのひとつとして、チャベス派陣営が数多くの国営放送テレビ・ラジオ局を利用し、チャベス派候補の演説や政治集会の様子をひんばんに中継していたことが挙げられる。ベネズエラ国営放送に至っては、通信衛星まで利用して、各地のチャベス派候補の選挙運動を中継した。一方、チャベス大統領が30以上にのぼるテレビ・ラジオ局を閉鎖してきたため、残る反チャベス派の民放テレビ局はグロボビシオン（Globovisión）1局である。

与野党両サイドの選挙運動において、政治アジェンダを語るような議論はほとんど出てこなかった。おそらく伝統的にそうなのであろうが、野党の方がまだ政治アジェンダに近いことを語っていた。とはいえ、反チャベス派も対立候補からの個人攻撃をかわし反撃することに忙しく、政治アジェンダに関する議論は内容が薄いものとなった。

このように選挙において政治アジェンダではなく候補者個人そのものが選挙戦の核となるのは、一部の研究者が個人支配主義や個人崇拜と呼ぶものに関係している。ベネズエラは大統領制の伝統があり、個人支配や個人崇拜に陥りがちである。個人的カリスマに支えられたリーダーシップのかたちはベネズエラ国民のあいだに浸透し、宗教的ともいえる個人崇拜が構築される。そしてそのようなリーダーシップのあり方は、とりわけ何十年にもわたって主権の行使か

ら疎外されてきた、または疎外されていると感じてきた大多数の人々の主権回復への希望につながったのである。これは、チャベス大統領の偶像を売る小売商、公共の場で行われる祈り、チャベス大統領の健康回復を祈る礼拝、そのほかすべての民俗的行為に表れている。

キューバでの闘病のために不在のチャベス大統領のプレゼンスを継続的に印象づけるため、また州知事選挙においてすべてのチャベス派知事候補の政治的基礎とするために、チャベス大統領の写真が全国に貼られていた。チャベス大統領は現在どうみても深刻な健康状態にあり、明らかに大統領としての責務を執り行うことができない状況にあるにもかかわらず、使われている写真は闘病中の写真ではなく、病气再発前の元気なときの写真である。

有権者に対してよりアピールできる候補者を擁立しようと意気込む反チャベス派は、このように個人カリスマに依存するチャベス派とは根本的に異なる戦略をとった。チャベス陣営は、有権者の感情に訴えかけ、彼らが無条件にチャベス大統領を支持することをめざしたのに対して、反チャベス派は、有権者が直面している重要な問題を解決することに焦点を当てた政策を提言してアピールしようとした。チャベスは「21世紀の社会主義」を掲げ、そのなかで幸福になるという約束に酔う大衆感情をもとに自身のカリスマを作り上げるが、一方反チャベス派のメッセージは、科学主義的（テクノクラートの）で、一見19世紀に花咲いた自由主義経済的にみえる。しかしながら実際には、チャベスのカリスマこそ19世紀ベネズエラを支配していたカウディージョ（頭領）のそれであるといえる。

もうひとつ重要な要素は、労働者の国家への依存の高まりである⁽¹⁸⁾。チャベス自身の大統領への立候補やチャベス派知事候補への支援のためにはチャベスのリーダーシップが不可欠であり、それを維持するためには、チャベス政権に食料補助を受け続けることで従属する有権者の存在が必要、すなわち政府にとっては、政府に依存せざるを得ない貧困層を再生産することが必要なのであるとまで議論する者もいる。政府にとって重要なのは、自由の制限、インフラの劣悪化、治安の悪化などの諸問題に立ち向かうことではなく、チャベス個人に国民が依存する現在の支配と権力のかたちを、いかなる犠牲を払ってでも政府は維持するということである。

支配と権力の維持が重要視されるあまり、多くの矛盾が未解決のまま放置さ

れている。たとえば、国民生活に関する重要な諸分野においてキューバ政府が介入していることについて、主権侵害だと批判されているが、政府からは、それは帝国主義に対抗してわが国の主権を強化するためであり、国家安全保障を深刻なリスクにさらすものではないという矛盾に満ちた説明がされる。またチャベス大統領の病状に関しても同様で、病状については説明されることなく、チャベスが引き続き権力の座につく必要性だけが強調される。そして、2013年1月、憲法が定める1月10日の大統領就任式にはチャベスが出席して宣誓できなかったにもかかわらず、政府はチャベスが引き続き大統領であると主張する。これらは、いかに現状がルールのない状況であるかを示している。なぜならば政府自身が、大統領の決定に沿ってあらゆる国家権力に介入するために、法律や規則を犯しているからである。国家権力はチャベスから制裁を受けない状況では何らの決定も下さず、その結果、権威主義的な政治運営を許し、さらには「何でもあり」の状況を生み、変化のないなかで組織が蝕まれ、暴力と犯罪が広がり、効率性が著しく低下する。

2012年の2つの選挙では、チャベス派、反チャベス派いずれの有権者も、国家の主要な問題について取り組むことを避け、相手を中傷することに終始した。このような姿勢は、カプリレス候補にとって、より大きなダメージを与えた。なぜならば、上述したとおりカプリレスは、諸問題の効率的解決と、社会に対して政府の責務遂行を訴えてきたからである。

【注】

- (1) チャベス大統領が推進する、社会主義国家建設に向けての政治社会経済的変革のこと。
- (2) 経済社会エリート層のこと。
- (3) 大統領不信任投票を求める反チャベス派市民の署名リストは選管に保管されていたが、チャベス派のタスコ国会議員がそれを持ち出し、インターネット上に流した（「タスコ・リスト」と呼ばれる）。これにさらに情報を追加してアップデートしたものが「マイサンタ・リスト」と呼ばれており、チャベス派陣営もそれを選挙運動に利用していることを認めている。
- (4) Torres, Ana Teresa (2009) *La Herencia de la tribu: Del mito de la independencia a la revolución bolivariana*, Caracas: Ed. Alfa.
- (5) 民主統一会議（MUD）は、キリスト教社会主義系、社会民主主義系、愛国派、中道その他、さまざまな政治傾向をもつ政党や政治団体による、反チャベス連合である。2008年1月23日に正式に創設された。
- (6) 1999年憲法第67条の規定では、選挙運動を含め、政治目的をもつ団体に公的資金を供与することを明確に禁止している。第2章第4節3.を参照のこと。

- (7) タレック知事のブログから (tarek.psu.org.ve)。
- (8) Mires, Fernando (2012) “El discurso de Capriles” (<http://polisfmires.blogspot.com>)。
- (9) カプリレスが反チャベス派の統一候補として予備選挙で選出されたときから、チャベス大統領はカプリレスを名前ではなく「マフンチュ」呼びわらした。たとえば、次のような演説がある。「マフンチュはアドバイザー連中に、私と対決するのはよせといわれたらしい。マフンチュ、それは無理だね。このチャベスが相手だからね。マフンチュ、私と対戦せざるを得なくなるか、それとも尻尾を巻いて逃げ出すかどちらかだ」。また、次のような発言もある。「マフンチュ、仮面をとったらどうだ。いくら化けたってマフンチュ、尻尾と耳は隠せないし、豚みたいな声を出すじゃないか。お前は豚だ！どんなに化けても、世界の終わりまで毎日私と対決することになるだろう、マフンチュ。チャベスとの対決は避けられないことだよ」(*El Universal*, 17 de febrero de 2012)。
- (10) チャベス大統領は2011年6月に癌が見つかり、キューバで摘出手術を受けたが、その後も同一部位に、2度癌が再発している。直近では2012年12月初めに3度目の癌摘出手術を受け、その後の術後経過が思わしくなく、2013年1月現在いまだにキューバの病院で療養している。
- (11) *Noticias 24*, 6 de noviembre de 2012. 強調は引用新聞記事のまま。
- (12) 第2章第2節3.「大統領選挙と議会選挙」で議論された「航空母艦効果」を参照のこと。
- (13) *Noticia 24*, 30 de octubre de 2012. 強調は引用記事のまま。
- (14) *Caracas* (PSUVの機関紙), 15 de noviembre de 2012.
- (15) 州政府、市政府によって構成される現行の地方分権構造を代替すべく、チャベス大統領が打ち出した新たな垂直的な国家権力構造。第1章第1節3.を参照のこと。
- (16) 注15を参照のこと。
- (17) ハウア元副大統領がこのような批判をするのは特記に値する。一般犯罪の激増とカラカスの検死所に毎週運び込まれるおびただしい数の犠牲者を取り上げるメディアに対して、社会不安をおおっているとして、チャベス政権は数々の法的圧力をかけ、罵倒、中傷を繰り返してきたからである。チャベス政権はつい最近まで、暴力、犯罪、治安悪化は、「センセーショナルに取り上げられている」だけで、市民が実際に実感している問題ではないと主張していた。
- (18) ベネズエラでよくいう「アレバの口輪 (bozal de arepa)」である。アレバはベネズエラの主食、口輪は、犬などの動物が飼い主にかみつかないよう、また従属するように口にかぶせるもの。すなわち政府から食料を受け取る(公務員雇用、補助金、その他のかたち)ことで、政府に文句をいわずに従属する国民が増えることを揶揄する言い回し。